役に立つ知識！ビジネス術

第６回 新聞を読めば仕事力に磨きがかかる

立春も過ぎました。もうすぐ新年度です。さて、新年度のスタートを機に、いちだんと磨きのかかった仕事ぶりを発揮したいものです。今回はそれを実現するためのちょっとしたコツをご紹介します。

発見を求めて開けば、「わがまま」を払拭してくれる

最近、新聞の購読者数が減っています。とくに若い世代に顕著で、わざわざ新聞をとらなくても、ニュースだって知りたいことだってネットで十分、ということなのでしょう。

けれど、ネットではできなくて新聞だからできることがあります。新聞ならではの利点は、「検索しない情報に触れられる」ことです。

ネット情報は自分がアクセスしなければなりませんが、新聞は紙面を開いて目に留まった記事があれば、つい読んでしまいます。読まなくても見出しくらいは頭に残ります。この違いです。

自分の興味が向かう情報だけを求めていると、当然のことですが、情報の領域が限られてきます。それが「わがままになる」ということです。自分の知識の領域に柵を設けると、成長の可能性が低くなり、「もったいない」ことになります。つまりは仕事の「幅が広がらない」「適応力が伸びない」ことにつながるのです。

音楽は、かつてはアルバムCDを買って聴くのがオーソドックスなスタイルでした。ところが、最近は聞きたい曲だけダウンロードできる機器と仕組みが普及し、アルバムというおよそ十数曲で構成された、送り手が伝えたい作品の世界ではなく、受け手が聴きたい、あるいは世の中の多くの人が支持するヒット曲だけが抽出されて聴かれるようになりました。アルバムに存在するトータル情報が、個人によって任意に選別され細切れにされて所有されるようになったわけです。「情報の私物化」が進んでいるのですが、もっと砕いて表現すれば、知識や情報について「わがまま」になっているということでしょう。

わがままでなかったら、もっといい曲好きな曲に出会えていたかもしれません。

他者のこと、世の中の問題に関心が高まればしめたもの

私的な趣味の分野であればそれもいいとしても、仕事は、自分の好き嫌い、興味のあるなしでするものでは、もちろんありません。いろんな相手が存在します。上司、先輩、同僚、後輩など周囲の知恵や協力を得ながら、いろんな相手がそれぞれに求めるところを汲み取り対応してこそ完結し、いい結果につながるものです。

昨今、就職活動に励む学生たちが、「協調性とコミュニケーション能力をとりわけ求められるのを実感する」といいますが、仕事は固有の私物化知識ではできないことを企業側が痛感しているからでしょう。

新聞には、政治、経済、国際情勢、社会、文化、スポーツと、世の中のさまざまな分野の出来事や情報･知識が詰まっています。新聞情報すべてを無邪気に「いいですよ」といえるかどうかはさておき、毎朝届く紙面には、国内外多数の記者が取材した記事が、字数にしておよそ20万（新書本2冊分相当）に及ぶ量で掲載されています。テレビ、ネットの情報も、新聞に負っているところが多いのですから、これに目を通す価値は否定できないでしょう。

世の中で起こっていること、人が関心をもっていること、社会で問題になっていることに、わがままな偏りなく接していくこと。これをサポートしてくれる存在として「新聞を読みましょう」ということです。ちょっと敬遠したい記事も、たまには読んでみましょう。　そうして、世の中のこと、他者のこと、未知の分野に関心や好奇心が生まれれば、しめたものです。

すでに熱心な読者は、目を向けるところを変えてみてください。

朝は慌ただしいものですが、せめて15分、見出しの拾い読みでもかまわないので、新聞に目を通すようにしましょう。夜、もう一度手に取り、朝よりも丁寧に目を通すようにしましょう。

勝手なアドバイス

おもしろい話やデータだと思った記事は、切り抜いておきましょう。手帳に貼っておくと、商談や打合せのとき、重宝するものです。のちに発想を刺激してくれることもあります。

切り抜いた記事は発酵して育つようです。

練習問題

Question

Q.1 朝刊一部に入っている情報は文字数にしてどれくらい?

A　8万字
B　10万字
C　20万字
D　30万字

Q.2 図示するトレーニングの効用は?

A　不足･未消化な知識が確認できる
B　情報の価値を選別する力が高まる
C　ことばによる説明を省くことができる
D　簡潔･明快な説明につながる

こういうことは日常行動に組み込めば習慣化しますから、しばらくは無理をしてでも続ければ苦にならなくなります。

物ごとを図示する習慣が緻密な理解を促す

もうひとつ試していただきたいのは、図を描いてみること。これを習慣化すると効果的です。

商品やサービスについて説明するとき、パンフレットなどのツールをよく使われるでしょう。パンフレットには図や表を用いて概要や仕組みがわかりやすく示されています。役立つ存在であるポイントのひとつが図です。

そういった図や表を、相手に応じてもっとわかりやすくなるように、自分で加工してみるのです。会議や打合せで伝える内容を図にまとめてみるのも、いいトレーニングになります。

物ごとを図にするのは、結構骨の折れる作業です。プレゼンシートを作るときなどに実感されているでしょう。何がむずかしいかといえば、内容すべてを理解していなければ、図に盛り込むこと省くことに迷います。どういう構成にすればいいかも、見えてきません。

図を作ることは、自分がどこまでその内容を理解でき、どこがわかっていないのかを確認する作業になります。情報の取捨選択が適切にできて、わかりやすい図が描ければ、そのテーマについて内容を消化できたことになります。

図を描くときも、新聞は貢献してくれます。年金の仕組みなども、たいてい図示されています。どういう作り方をしているのか、参考にしてみてください。

回答

Answer

Q1解説:答え:C
全国紙の朝刊はおよそ30面超あります。記事面下部の5段広告や全面広告のスペースを除いて算出すると、およそ20万の字数になります。A4判で作成した書類だと160枚以上になります。

Q2解説:答え:A、B、Dは○、Cのみ×
C も間違いではないのですが、図をわかりやすく説明することばが伴ってこそ、説明が行き届くことを忘れないようにしましょう。

中山 秀樹（なかやま ひでき） 1952年、山口市生まれ。
株式会社HRS総合研究所代表取締役、近畿大学理工学部非常勤講師。同志社大学卒業後、出版社に勤務しマネジメント雑誌の編集長を務める。その後、語学スクールの出版局長として雑誌の制作を統括、現職に。人材育成･人間関係づくりの研究とセミナーを行うとともに、ビジネス書籍を編集･制作。近著に『ほんとうは大学生のために書いた日本語表現練習帳』（すばる舎リンケージ刊）。